

## 自然は警告する 慣れからの災害

慣れとは恐ろしいもので、暖冬が何年も続くと雪は少なくて当然と思えてくる。ところが一転して大雪となると予想外に雪に弱いことに気づいて愕然とする。

今年の札幌の冬がまさにそれで、十年ぶりの多雪となつて降り積もつた雪の合計が現在六尺二十<sup>セシ</sup>。一九五三年に統計をとり始めてからの最多雪の記録となり、暖冬で少い雪に慣れた市民には除雪やら交通渋滞などで困っている。去年は三月の月半ばで雪が消えておりその落差は大きい。

札幌への一極集中で十年前に比べて人口も周辺を含めて五割近く増加となり、山の斜面や谷筋、郊外に延びた住宅街がとくにダメージを受けた。ご他聞にもれず東京の地価高騰の波及で札幌も上昇し、新興住宅街の敷地が一段と狭くなり、雪の逃げ場の不足で混乱に拍車をかけている。急激な都市化が招いた静かなる災害となり、雪への十分な対策抜きでは北国での冬の快適な生活が保証されなことが念押しされた格好になった。

自然に逆らつて被害を招いた例も多い。十年ほど前に茨城県を流れる小貝川の堤防が決壊するという災害があつたが、近くの昔ながらの農家は土盛りが高く浸水を免れていたが、決壊箇所から遠い新興住宅街が広範囲に浸水被害を被つた。阿武隈川の洪水の時も地元に進出したハイテク企業の工場が大きな浸水被害を受けた。

現在のように人の動きが激しい時代では、十年から二十年くらいでその土地ごとの脆弱さを見忘れてしまうことが多い。大津波で何度も被害を被つた三陸沿岸では、頑丈な防潮堤が街をグルリと守っているが、チリ津波から三十年たった今では防潮堤の海側に家が建ち始めたという。

この冬の札幌の多過ぎた雪も、慣れに対する自然からの警告かもしれない。